

Ⅱ-2. 特別支援学校での ICF-CY 活用の実際 1

－児童生徒の全体像の整理と課題の明確化を中心に－

キーワード 特別支援学校 ICF-CY 課題の明確化

1. はじめに

(1) 学校の概要

秋田県立勝平養護学校（以下、本校）は、手足や体幹に運動障害がある児童生徒が通う特別支援学校（肢体不自由）である。在籍児童生徒数は、75名程度で推移しており、隣接する県立の肢体不自由児施設「太平療育園」の入園児が在籍者の約8割を占めている。小学部・中学部・高等部が設置され、障害や疾病の状態により次の三つの類型による教育課程が編成されている。

I 類型～小学校・中学校・高等学校に準じ、教科学習を中心とする。

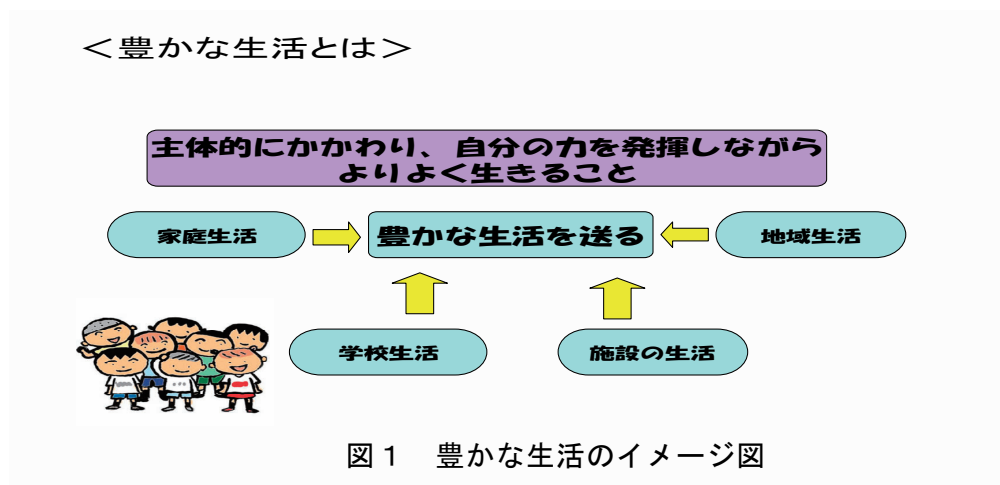
II 類型～知的養護学校の教育課程を活用する。

III 類型～自立活動を中心とする。

教育課程については、これらを基本としながら柔軟な運用を進めてきたが、児童生徒の実態の多様化や重度・重複化、それに伴う個々のニーズの変化などから、根本的な改善の必要が生じてきている。

(2) 研究テーマについて

(1) で述べたことを背景として、本校では児童生徒の「豊かな生活」をキーワードに教育支援を考えていくことにした。本校では「豊かな生活」とは、家庭・学校・施設・社会での生活に希望をもち、自分の力を発揮しながら主体的に人やものにかかわり、活動に参加していくことと捉えている（図1）。



そのためには、環境も整えながら、個々のニーズに合わせた教育支援が行われることが必要である。その際、児童生徒や保護者の願いを受け止め、要因分析を経て教育的ニーズへと変える作業が必要となり、それらが具体的な指導における課題として設定され、系統性をも

った教育プログラムに整えられる。

そこで、児童生徒一人一人の「豊かな生活」を支える教育プログラムの策定に際して「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」をつなぐものとして ICF を活用しようと考えた。

(図2) これは ICF にみられる、環境面も含めて多面的・総合的に捉える見方や、共通言語としての性格を利用した連携ツールとしての有効性に注目したからである。図2は、それらの関係を表したものである。

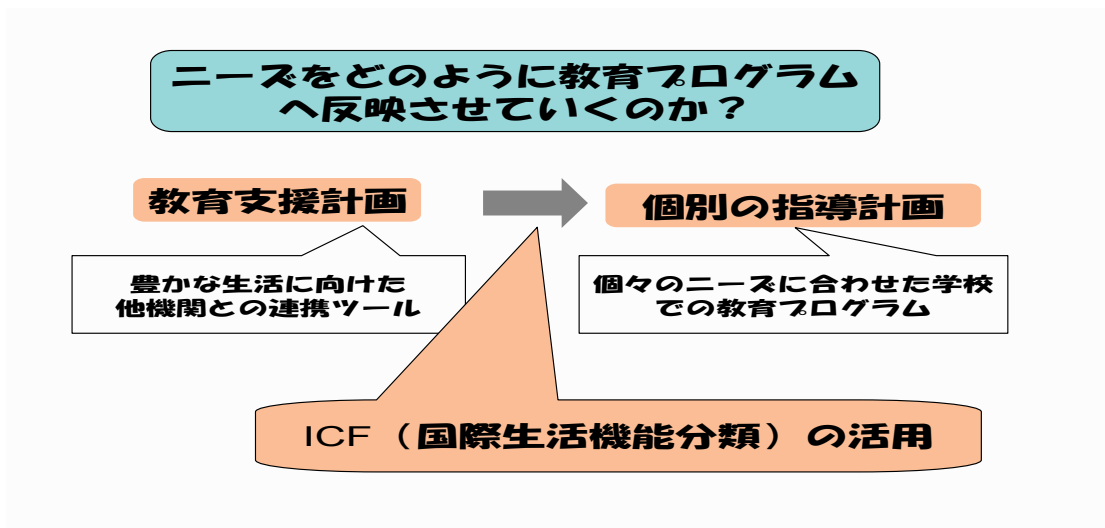


図2 ICF と個別の教育支援計画，指導計画の関係

これらの状況を踏まえ、本校では、研究テーマを「豊かな生活を目指した個のニーズに応じた教育支援 ～ICF 活用による焦点化された課題の授業への展開と評価～」と設定し、研究に取り組んできた。

2. 取組の経過

(1) ICF 活用の流れ

本校では各学部・各類型で事例児童生徒数名を取り上げ、図3に示した流れに沿って個別の教育支援計画と個別の指導計画を授業に生かす取組を実践してきた。

まず、児童生徒の実態を把握するために、一部 ICF-CY の項目を加えた ICF チェックリスト¹⁾²⁾を活用し ICF 関連図を作成した。そして、児童生徒の全体像を捉え、関係者による活動と参加を促進するという観点からの児童生徒の課題を見直しと、話し合いにより「焦点化された課題」を設定した。この課題を踏まえて、『個別の教育支援計画の支援目標→個別の指導計画の目標→題材の目標→1時間の授業の目標』と一連の流れの中でそれぞれの目標を設定し、授業に活用されているかどうかを検討しながら進めていくことにした。また、授業研究会においては、関連図を用いて教員間で児童生徒の理解を深めたり、関係機関である太平療育園の医師や PT・OT・ST、看護師の意見も取り入れて関連図を見直したりすることで連携ツールとして活用していくようにした。

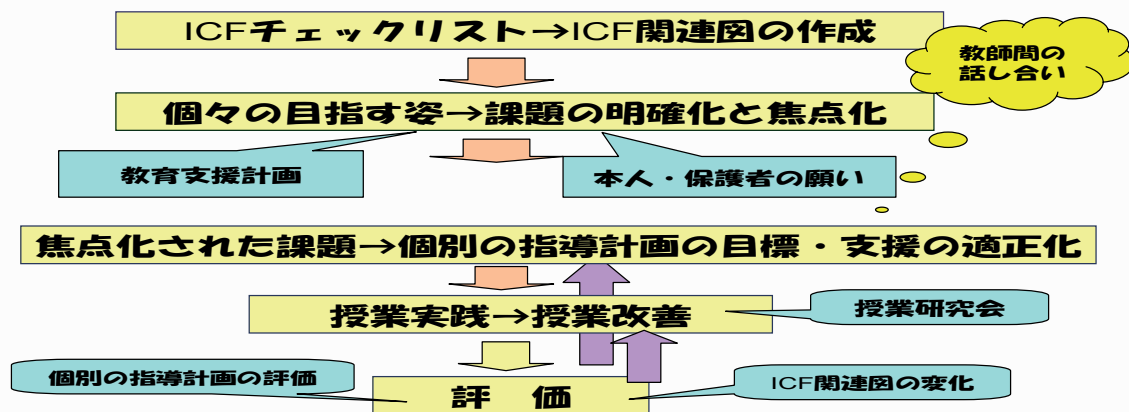


図3 ICF活用の流れ

(2) 実際の取組

各学部とも図3の流れで研究を進めた。その中から、小学部5年生のA男（Ⅲ類型の教育課程）についての「好きな人や物を媒介として、発声・動作での意思のやりとりを楽しむことができる」という具体例を次に紹介する。

① ICF 関連図から捉えたA男の実態と目標設定の流れ

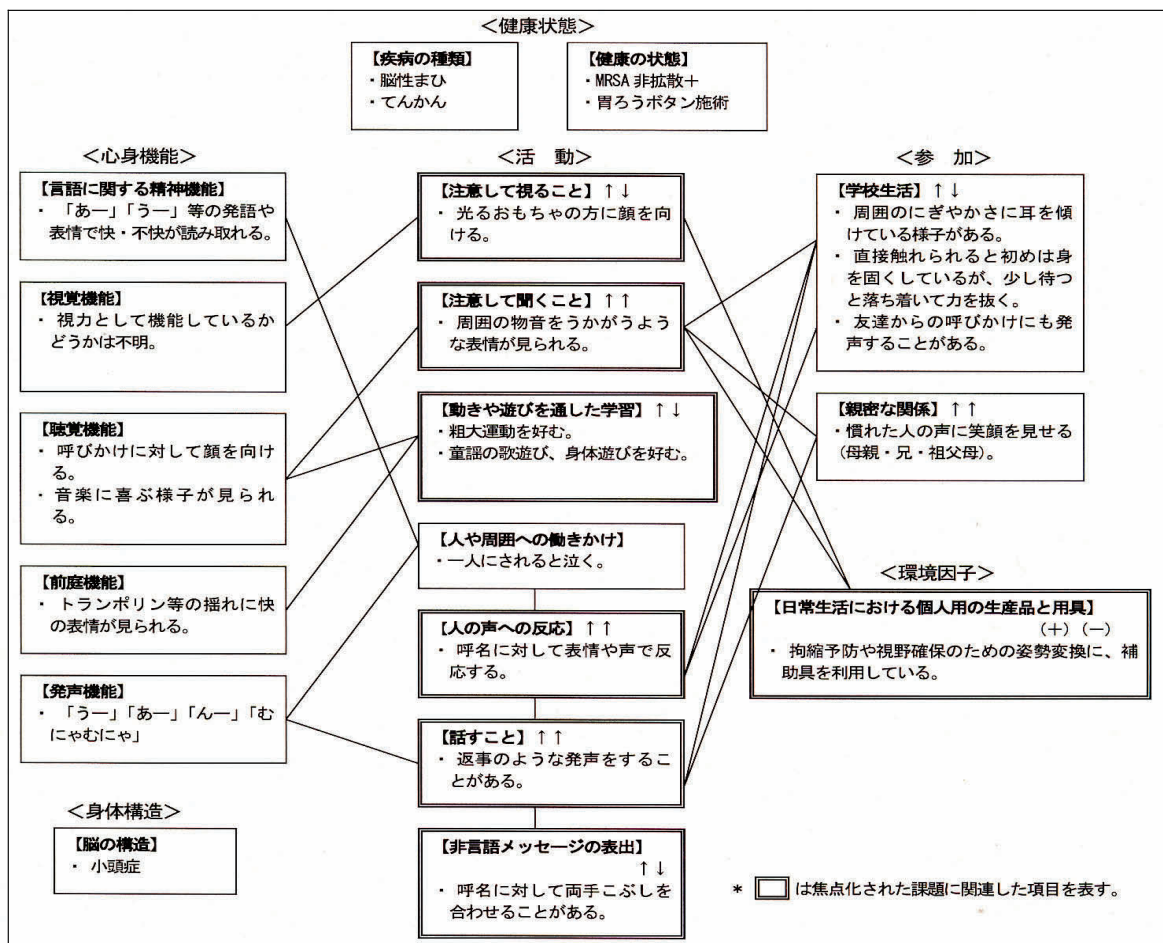


図4 A男の実態を整理したICF関連図

(※縦の二つの矢印(「↑↓」など)は、右側が「実行状況」、左側が「支援なしの能力」を指す。)

この ICF 関連図（図 4）から、A 男の実態を次のように捉えた。「注意して視ること」「注意して聞くこと」「人の声への反応」「非言語メッセージの表出」等のコミュニケーションに関する項目に、現在伸びつつある力がうかがえる。また授業では「動きや遊びを通じた学習」に快の意思表示が見られる。また、それらの向上を支えるために大切な姿勢面での配慮が「日常生活における個人用の生産品と用具」という項目に表れている。

○焦点化された課題

図 4 を資料として検討した結果、A 男の課題を「好きなことや物を媒介として、発声・動作での意思のやりとりを楽しむことができる」と焦点化した。

○個別の指導計画の目標

- ・小集団のかかわりを楽しみながら、好きな活動を増やす。

○題材の目標

- ・教員の言葉かけに応じて表情や発声で楽しさを表現する。
- ・上肢を動かして楽器を鳴らすことができる。

○本時の目標

- ・教員の言葉かけに応じて「ない」「わっ」の驚きの場面や喜びの場面で声を出したり、手を動かしたりする。
- ・自分が注目される場面で、教員の言葉かけに応じてひもを引っ張りウインドチャイムを鳴らす。

②本事例での指導の成果と課題

このような流れで授業の目標や教員の支援を設定し実際の指導にあたってきた成果としては、A 男の課題の背景について多面的に考え、全体像を捉えることにつながったことが挙げられる。この流れの中で、本児の場合、意思表示の向上のためにはどの項目をサポートすることができるのかということに目を向けることができた。また、焦点化された課題について教員間で共有することで、言葉かけの仕方や、応答の待ち方、姿勢への配慮に共通理解がなされた。一方で課題としては、チェックリストから関連図の作成までの作業の効率化と、太平療育園との連携に十分活用するための作成時期の検討が挙げられる。

3. 本校の取組全体での成果と課題

（1）成果

①環境も含めた「活動と参加」という視点への気づき

これまで述べてきた取組を通して、本校教職員が児童生徒の「豊かな生活」を考える際に、「どうしたら参加できるか」ということについて環境も含めた視点で課題や支援の仕方を考えるようになってきた。また、課題の背景について確認するとともに、それが具体的な授業の目標へどう活かされていくのかを検討することにつながった。

②連携ツールとしての有効性

ICF チェックリストを通して多面的に個々の児童生徒を捉えるとともに、それぞれの児童生徒の指導にあたる関係教職員の間で関連図を作成することで、課題間のつながりや児童生徒の全体像を捉えることができた。特に平成 19 年度は ICF-CY²⁾ の項目を部分的に使用した

ことにより、様々な発達段階にある児童生徒にとっての実態をより細かく捉えるのに役立った。また、PT、OT、医師からの意見を取り入れることでより多面的に捉えることができた。

③ICFに関する教員間の理解

ICFの基本的な内容についての研修会や、小グループに分かれて一定時間で簡単な関連図を作成する演習を行った。また、公開研究会を実施し外部からの意見を受けたり、講演会で本校の研究内容も含めたICFに関する詳しい内容を聞いたりすることができた。こうしたことから、徐々に教職員間のICFに対する理解が深まり、外部へ発信していこうという意欲にもつながったように思われる。

(2) 課題

①作成の効率化と作成時期の検討

ICF活用の有効性については理解が深まりつつあるが、実際に教育計画等へ組み入れていくためには、関連図作成までの手順の効率化や、作成時期の見直しが必要である。現在ある形式との整理を含め、研究以外の分掌組織とも連携して検討していく必要がある。

②本人の自己理解と参画

今回の事例検討の対象児童生徒においては、保護者へ関連図を直接提示し、本人の願いも入れて作成している。しかし、本人に関連図そのものを提示するところまでは今年度は進んでいない。本人と一緒に関連図を見ながら作成することが、自己理解を深め、よりニーズを取り入れることにつながると考える。

引用文献

- 1) 世界保健機関(WHO)著 独立行政法人国立特殊教育総合研究所訳：ICFチェックリスト(日本語訳版)バージョン2.1a臨床用フォーム、国立特殊教育総合研究所編著：ICF活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー、ジアース教育新社、2005.
- 2) WHO Workgroup for development of version of ICF for children and Youth, ICF-CY DRAFT September 2006.

(高田屋 陽子)